様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２４４６

研究課題名（和文）エコクリティシズムによる養生論分析及び養生書出版年表と養生書英訳の作成

研究課題名（英文）A Study about the Yojo-ron (care-of-health theory in Early Modern Japan) from therapeutic landscape and the Making of catalogue of Yojo books' publications

研究代表者
趙　菁（ZHAO, JING）

金沢大学・外国語教育系・准教授

研究者番号：５０３４５６４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代の養生文化から3.11震災後までの保養プログラムまでの健康観の歴史的変遷の分析に際し、1990年代に人文地理学者Wilbert Geslerが提唱したTherapeutic Landscape批評理論を援用した。また、江戸時代養生書目録の作成に当たって、刊本のみならず、従来の養生研究に言及されていない、写本しか残されていない養生書の存在を見出した（『養生問對上』（天理図書館特別本）を翻刻して報告した）。また文芸の視点による養生書の特徴分析を報告した（『申楽免廃論』）。『養生要論』『続養生要論』の注釈・英訳を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
養生研究に欧米発祥の批評理論を取り入れることは、江戸時代の養生文化を分析する新たな見地（切断面）を提供したのみならず、日本の健康文化を育む健康観と自然観を国際社会において発信し、その重要性と存在感が認識されることに一役買うことができたと確信する。また養生書に反映された健康や疾病に対する江戸庶民の認識、そして藩主による文芸と養生の関連は、現代の健康と社会、環境の相互関係を考える上で、特にポストコロナにおける健康観の構築に歴史的な原動力と励みを与えてくれると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study I showed the concept of therapeutic landscape which was developed by Wil Gesler in the early 1990s to be an insightful and effective approach for studying closely the process of healing after the earthquakes hit northeastern Japan and the catastrophic meltdowns at Fukushima on March 11, 2011, explored how the current hoyo treatment resonates with the historical practice of health culture in Edo period of early modern Japan.
In the meanwhile, there are indistinct date about the publications and possessions of Yojo books. And there are fewer studies that have paid attention to unknown anonymous writers or writers excepting doctor. According to the researching of Yojo books' publications, this study also provided an overview of, Yojo books' publications, and analysis a few less known Yojo books which written by various fields. This study also contributed to modern Japanese translation and commentaries on Yojo books, Yojoyoro and Zokuyojoyoron.

研究分野：人文学

キーワード：養生論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究者は 2015 年 8 月から 2016 年 7 月のサバティカル研修において環境文学の拠点である米国のアイダホ大学で、国際的な研究者のネットワークに参加し、エコクリティシズムによるアプローチを摂取し、本課題に大きな励みと良い刺激を得ることができた。研修を通して、エコクリティシズムによるアプローチが現代の健康と環境の相互関係における江戸時代の養生論の歴史的重要性を考える上で十分な価値があることを認識した。特に、2016 年 4 月アラスカ大学アンカレッジ校で開催された学会（Knowing One's Place: Understanding the Influence of Place in Language,Pacific Rim Conference On English Studies）のための研究発表準備、研究発表そして学会参加者との交流を通して、1990 年代に人文地理学者 Wilbert Gesler が提唱した Therapeutic Landscape（場所による人間の身体、精神に対する療治作用）批評理論に出会い、養生論の現代における意義と価値を認識するに当たって、Healing place という視点からの分析も必要であると思い至った。

一方、江戸時代に発行された養生書の数、またそれらの養生書の現在の所蔵状況及び閲覧可能状況については今なお不明な点が多いと言える。江戸時代の養生書刊行については、鈴木敏夫(1973）は養生についての記載の程度によっては養生書として扱っていいもの、さらに埋没した書物も存在するとして正確に規定できないのを理由とし、彼が挙げた 41 編の養生書より、総数は下がることがないと述べた。そして、吉原瑛（1998）は「江戸時代養生書出版年表」において発行年のわかるもので総合的に養生を述べたものに限定して 130 編の養生書を記している。ただし、この中にどれだけの書が現在に伝えられ且つ閲覧可能かは明記していない。一方、滝澤利行（1998）は養生書の出版年表を作成していないが、収集または閲覧してきた江戸時の養生書は約 70 編あまりであると述べた。現在、江戸時代の養生論に関する研究において、版元がわからないものまで含めると百種以上に及ぶといわれるほどである。

本研究は江戸時代の養生論の全体像を把握するにあたって、『国書総目録』『日本衛生史』『日本衛生文庫』『日本庶民生活史料集成』等及び上記先行研究を踏まえ、江戸時代の養生書の収集、所在の確認及び翻刻状況について調査する必要があるとの認識に至った。特にいままでの養生研究に言及されていない江戸初期の養生書の存在や江戸後期の医者以外の養生論著者の言説に映し出される養生観について明らかにする必要性を痛感している。

また、江戸時代の養生論については、英訳版がある貝原益軒の『養生訓』のみが海外に知られている状況を鑑み、江戸時代の養生論の存在感を国際社会に示す一環として、これまで研究対象とした『養生要論』『続養生要論』の英訳を行うことに至った。

２．研究の目的

(1) Therapeutic Landscape という批評理論を取り入れ、新たな見地（切断面）による江戸の健康文化を育む「健康観」及び「自然観」を分析すること。

(2）江戸時代の養生書の出版・所蔵・翻刻・閲覧状況についての調査を行い、江戸時代養生書目録の作成に当たって、従来の養生研究に言及されていない、写本しか残されていない養生書の存在を把握し、内容分析を行うこと。

(3) 文芸の視点による養生書の記述を分析することを通して、養生はただ寿命を延ばすための行いであるだけでなく、生命をいかなる質で充実させていくのかという江戸時代後期の養生観の変化を支えた生活・人間・自然への個々の著者の考え方を明らかにすること。
(4)これまで研究対象とした『養生要論』『続養生要論』の英訳を行うこと。

３．研究の方法

研究方法は、各養生論の出版、所蔵そして原典および二次資料について各研究機関の図書目録、研究書、研究論文を参照し、精確に整理分類し、出版年表を作成した。環境と文化の関係を分析する欧米批評理論を取り入れて江戸時代の健康観、自然観をより複合的な見地から分析した。

近年、江戸時代の諸文献の電子テキスト化が進展しているが、養生論に関しては特に本研究が対象としている、従来言及されていない、注目されていない養生書はほとんど電子化されていないため、所蔵先に出向いて直接当該資料を閲覧し、収集することが求められた。

４．研究成果

(1)　江戸時代の養生文化から 3.11 震災後の保養プログラムまでの健康観の歴史的変遷の分析に際し、1990 年代に人文地理学者　Wilbert Gesler が提唱した Therapeutic Landscape 批評理論を援用した。東京、ソウル、台湾、クアラルンプールなど日本国内外で開催された学会(International Health Literacy Conference;日本医学哲学・倫理学会）で研究発表を行い、Therapeutic Landscape によるアプローチ（主に 1) Mobility　2) Social Support　3) Recovery Treatment and Healing　の三点において）を究めた。そのなかに、特に日々環境汚染に曝されている現代人の健康認識・環境問題の対応を考察する際に、江戸時代の養生論がいかなる意義を持つのかについての考察に努めた。

2011 年 3 月以後、ウクライナやベラルーシを参考に、原発由来の放射能汚染を避け一時的に移動する「保養」が日本ではじまった。現在、日本の 29 の都道府県にて 234 以上の市民団体が保養を行い、2014 年から 2015 年の 1 年間で福島県など約 15000 人以上（主に子供）が、受け入れ支援団体を通して保養に行った。

保養は江戸時代に盛んだった養生文化に起源を見ることができ、近代以降の日本社会においても健康づくりに大きな役割を果たしている。歴史的流れを考慮すると、福島原発後の保養がチェルノブイリ原発後の対応を参照したとは言え、その保養を培う土壌がはるか前からすでに日本にあったと指摘できる。本研究は江戸時代から現代までの保養の歴史的変遷を鑑み、保養、養生の概念を比較対照し、アジアではまだ現代の日本のような「保養」は現れていないが、日本の取り組みは人間・社会・環境の相関関係を見る上で、アジアの国々の参考になる部分が大きいのではないかと考えた。考察結果を研究論文にまとめ、2018 年春に *Communication and the Public* に投稿した。

(2)「江戸時代養生書目録」の作成に当たって、これまでの養生書研究において、積極的に取り組まれてきたとはいえない、より通俗的な養生書についてその所蔵・翻刻状況などの考察を取り込んだ。特に江戸時代初期の庶民の健康や疾病に対する認識を反映する『養生問對上』（天理図書館特別本）について翻刻して日本医史学会で報告した。

『養生問對上』には、書名そして「春夏秋冬」「人」の文字の外すべてがひらがなで記され、内容は庶民の生活体験や身近な事物の喩えを使い、養生の意義と仕方を語っている。これまでの養生書に比べ、ここにある表現は洗練されたものではなく、むしろくだけた表現のほうが目立っている。読者層の理解度に対する配慮も読み取れると考える。『養生問對上』に対する先行研究は、管見のかぎり見当たらない。『養生問對上』は、それまでの養生書に比べて、養生知識を一方的に庶民に与えるのではなく、庶民の自発的な養生に関する疑問に沿って、それに適合する養生法を提供しようとする姿勢が見て取れる。江戸時代初期における庶民の身体や精神に関する認識の度合い、そして庶民に対して展開する身体や精神の養生に対する知識の普及の実態を読み取れる文献として、このような文献が養生書研究の対象として十分に価値があると考え、翻刻および分析を行った。

これまでの養生書研究は元禄・正徳期と化政期の刊本養生論に力点が置かれてきたが、本研究は刊本中心の養生書研究にとどまらず、近世初期に書かれた『養生問對上』のような写本によって残されている養生書に対する考察が養生論研究において不可欠であると考え、今後も更なる養生書の所蔵調査、考察と分析を続ける。

(3)「不老長生、無病長寿」を目的とした貝原益軒を含む江戸中期までの養生論に比べ、江戸後期の養生論は目的が多様化していた。本研究が江戸後期の養生論の多様化及びそれを支えた思考を知る一環として、能稽古を用いた養生の記録を考察分析し日本比較文学会で報告した。

本研究は、加賀藩の歴代藩主に関する文献、特に前田斉泰が著述した『申楽免廃論』に見られる能稽古を用いた脚気治癒後のリハビリ記録、そして幕末の町人生活を記した日記に見られる、町人たちが能稽古を用いて心身ともに楽しんでいた記録を通して、「空から謡が降ってくる」といわれるほど加賀の人々の生活の中で親しまれてきた能楽について、健康を主題とした文化的コミュニケーションの産物である養生論の視点からその在り方の特徴を考察した。

加賀藩歴代藩主の中で長寿を得たと言える 13 代藩主前田斉泰（1811-1884、74 歳）は天保 13 年（1842）に重症の脚気を患い、2 年間に及ぶ闘病生活を経て、弘化 2 年（1845）の春に重病を克服し普段通りの生活に戻った。斉泰は医学的な治療が効果を上げたことに加え、仕舞を日課として養生したことこそが回復を成し遂げた重要な理由だと確信し、その春に『申楽免廃論』を執筆し、能楽を為したことで廃人になるのを免れたと熱弁した。

能楽の動作と身体の健康に関する最近の研究において、摺り足運動が身体バランス及び深層筋の鍛錬に効果的であることが検証されつつある。斉泰が『申楽免廃論』に述べた能楽の歩行による身体の健康効果が注目を集めるようになっている。

『申楽免廃論』において、斉泰が健康に関する能楽の有益性を論じたことは確かであるが、この書は単なる健康の保持増進の記録ではない。本研究は、『申楽免廃論』の著述目的を考察し、庶民に一般的な養生知識や技術を教授する当時の養生関係書とは異なり、斉泰が養生と能楽を結び付けた考えには、藩主しかなし得ない養生法、そして藩主ならではの苦悩が秘められていることを指摘した。

江戸時代は日本の養生文化が開花し、さまざまな種類の養生論が世に溢れて一時代を築いたと考えられる。とくに幕末に庶民向けの養生論が多く出現したと言われるが、藩主のような指導者層の立場による養生言説は少ない。日本の養生論の歴史においても、前田斉泰の『申楽免廃論』の存在は、その多様性の一様相として非常に意義のある養生書である

と考える。

このように、本研究は能稽古を用いた養生の記録から見られるような日常的な実践による身体への配慮が江戸後期に特に目立つようになったこと、そして身体や精神の健康に加えて、文化、教養をも含んだ健康形成、人間形成を相互関連的に実現していく構造が江戸後期の養生文化にて具現化されていたことについてその詳細を考察することができた。
(2)と(3)の考察は分離するものではなく、それぞれを踏まえながら分析を進めた。(3)考察結果は『金沢大学国語国文』44 号に投稿した。

（4）江戸時代の養生論の実態像・全体像を国際社会においてその重要性と存在感を認識させるために、本研究はこれまで研究対象であった『養生要論』『続養生要論』の英訳を取り込んだ。

本研究期間によって得られた新たな知見、特に研究成果の(1)(2)(3)を踏まえ、今後更なる発展を遂げていく。

本研究、養生研究に欧米発祥の批評理論を取り入れることは、江戸時代の養生文化を分析する新たな見地（切断面）を提供したのみならず、日本の健康文化を育む健康観と自然観を国際社会において発信し、その重要性と存在感が認識されることに一役買うことができたと確信する。また養生書に反映された健康や疾病に対する江戸庶民の認識、そして藩主による文芸と養生の関連は、現代の健康と社会、環境の相互関係を考える上で、特にポストコロナにおける健康観の構築に歴史的な原動力と励みを与えてくれると考える。

本研究は研究成果を社会に発信するに当たって、2017 年 4 月市民向けの金沢大学サテライト・プラザミニ講演（「江戸時代の健康観－養生論に見る人体認識をめぐって」）を実施した。市民から本研究に対する多大な関心が寄せられた。そして 2020 年 6 月実施予定であった市民向け大学公開講座「冠婚葬祭－儀礼から見る世界の文化」の「古代の祭りと養生」は新型コロナ感染症の関係で中止となったが、2021 年度にて実施し、研究成果を社会に還元する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Zhao Jing	４．巻 Volume 3 Issue 4
２．論文標題 Place, sociality, health: Forms of relocation and recuperation in modern Japan.	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Communication and the Public	６．最初と最後の頁 302,309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/2057047318812919	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 趙菁	４．巻 44
２．論文標題 前田斉泰『申楽免廃論』について―能楽に養生的価値を見出す理由―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 金沢大学国語国文	６．最初と最後の頁 28,39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 趙菁	４．巻 0
２．論文標題 養生論からみた里山	５．発行年 2017年
３．雑誌名 里山という物語	６．最初と最後の頁 257,268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 趙菁
２．発表標題 『養生問對上』について
３．学会等名 第120回日本医史学会総会・学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 趙菁
２．発表標題 健康観念までの「養生」多様像―教養、階級、環境からとらえていく―
３．学会等名 人間文化研究機構　広領域連携型基幹研究プロジェクト、アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開、「健康」の歴史性　研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Zhao Jing
２．発表標題 Nurturing a Healthy Life for All by Involving All: The Publications of Yojo (nurturing life；養生) in Early Modern Japan
３．学会等名 The 6th International Health Literacy Conference: A Health Literate Asia and Beyond（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 趙菁
２．発表標題 日本の保養をTherapeutic Landscapesの視点より考える
３．学会等名 「健康」の歴史研究会、「人間文化研究機構　広領域連携型基盤研究プロジェクト　アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開Asian Society for Social History of Medicine
４．発表年 2017年

１．発表者名 趙菁
２．発表標題 「養生」から「能」を観る―加賀藩を例として
３．学会等名 日本比較文学会第53回関西大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 趙菁
２．発表標題 「保養」考ー江戸時代から3.11震災後までのヘルスケアを辿ってー
３．学会等名 第36回日本医学哲学・倫理学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 趙菁
２．発表標題 Place, Sociality, Health: Forms of Relocation and Recuperation in Modern Japan
３．学会等名 The 5th AHLA International Health Literacy Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 福士由紀・市川智生・アレクサンダー・R・ベイ、キム・ヨンス編	４．発行年 2021年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 300
３．書名 『健康と環境の東アジア史』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関